

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた戦国武将

一豊と掛川

その5

信長・秀吉が振興した 楽市楽座を連雀に



江戸時代の絵図より

町づくりの基礎 楽市楽座

戦国時代末期、武士団は純消費者となり、生活必需品やサービスを商人・職人から受けるようになりました。一豊も城の近くに、旧領の近江地域から随従した者や掛川の住民を集めて住ませ、業種別の町づくりを行います。東海道沿いの表町は、商人を置き商業と街道交通の宿駅・伝馬の町としました。

東海道の本南側の道沿いには、人々の生活に必要な物を扱う、刃物を研ぐ職人が住む研屋町、染物店がある紺屋町、海産物を扱う肴町や塩町、材木を扱う木町と職種別に集住させ、これに寺社を配置して宿場町を作りました。

町の中心部の大手門近くには、信長・秀吉が新しい商業施設として振興した楽市楽座にない連雀座を設けました。

近江との関わりが深い掛川の商業

後に本陣職を務めた沢野弥三左衛門は、近江時代の一豊の家臣で、その後商人になり、代々掛川に住んだ人です。一豊の前任地である近江から多くの商人が移住したと思われ、一豊時代から掛川の商業は、近江の人々との影響が深かったことが想定されます。



1620年ごろの記録に、「仁藤町の十右衛門、中町の甚七郎、西町の次郎太夫という者、お互いにその宅を問屋となし」とあり、一豊時代の宿場町が、江戸時代にかけて商業地・宿場地として継続し発展していたことがわかります。

一豊時代の掛川領内の職人名

- 「なしちや」----- 梨子地屋
- 「いしはいやき」--- 石灰焼き
- 「かわらやき」----- 瓦焼き
- 「かじ」----- 鍛冶
- 「ぬし」----- 塗師
- 「御矢師」----- 弓師
- 「ぐそくや」----- 具足屋
- 「さやし」----- 鞆師
- 「しろかねや」----- 白金屋
- 「ゑさし」----- 餌屋

ほかに、「留守居衆」「御鷹匠」「御合力衆」の名前が山内家の記録に残っています（一豊紀）



楽市楽座とは...

戦国・安土桃山時代、大名が商人をその治下に集めるため、城下町や重要都市で旧来の独占的な市・座の特権を廃し、新規の商人にも自由な営業を認めました。

江戸時代から続く東海道沿いの呉服店「ます忠」この西角に高札場がありました（仁藤町）